

024

幼児の色彩感について 一配色の場合一

畠井葉子 水野寿子（名古屋聖母短期大）

本研究は昭和52年2月聖母短期大学紀要に発表した研究「配色の嗜好性に対する考察」に対する続報である。そこにおいて被験者が選択する色とその色をもつ対象物とが選択者の意識の中でのどうとうに密着しているのかといふことがしばしば問題になつた。幼児は、「赤はいちじだから好きだ」といふ。しかし、すべての幼児が「赤はいちじ」ではない。一般に、女性は色彩の好き嫌いを問われると、自己の服装に関しての連想を行う場合が多く、男性は女性に関する連想を行うといわれる。それで今回の研究においては、上記の場合と同じく衣服における色彩の配色を中心にして実験を行なつた。中学生、短大生に対しては、衣服における配色の好みを取つたが、幼児に対しては、それ以外に帽子と旗の絵を提示して、対象物の変化によって結果がどのように影響されるかを調べた。色の好みを調べることは決して容易ではない。この研究は方法の妥当性を検討することを目的としている。

I. 実験目的：①、衣服における配色について、幼児が中学生及び短大生とどのように異なるかを調べること。②、対象物が異なると配色の嗜好性に差異が見られるか否かを調べること。③、幼児の配色における色彩感を調べるために方法を考察すること。

II. 実験場所：名古屋市昭和区にある聖母幼稚園園舎内の一室。

III. 実験期間：昭和53年12月から54年2月まで。

IV. 実験対象：聖母幼稚園二年保育児66名。年令4才～5才、聖母短期大学生75名、同中高一年生53名

V. 実験手続、及び方法：

図1に示すスカートをはいてブラウスを着てある婦人のモデルを中学生と短大生に、また同じようなスカート、ブラウス姿の子ども9モデル幼稚園の児童に、ズボン、ブラウス姿の子ども9モデルを男児に、白紙に印刷して一枚づつ用意する。



図 1

さらに、図2に示すような旗の竿と旗を白紙に別々に書き、被験者に示すのが一枚だけ用意しておく。その他に、図2-(c)に示す半分を黄色、ケレヨンでぬつた三角形の紙片をやはり実験用として一枚だけ用意する。

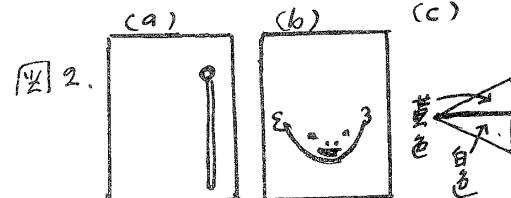
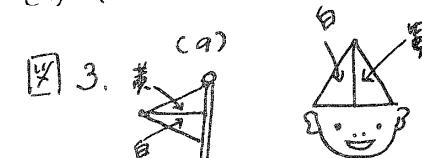


図 2.

実験はなるべく個別に行なうにしたが、被験者同士が反応を知らせるないように注意しながら数人同時に実験を行なつた。

このほか実験に必要なものはケレヨン8本である。こでは、株式会社サクラケレバース製造のサクラケレヨンの中から、青、赤、緑、黄、だいだい、黄緑、ももいろ、水色の8本を使用した。それは四主色とそれらに属する主色でない色を念頭に万引きながら選択した。

ここで、実験者はこれらものを用意して、被験者とむかひあり、8本のケレヨンをまず並べて一番好きな色を取らせる。(本選んで手にも及んでから図1に示したスカート(またはズボン)につづりラウスをしたモデルの絵を複数して、スカートを手にもちていちじケレヨンの色でぬらせる。ぬり終つたならば、そのスカートの色に最も合う色でづづりラウスをぬるように求めよ。中学生と短大生はこれだけの作業が要求される。幼稚園児は、さうに、図2で示した旗の竿と旗の絵を一枚づつ示され、旗の竿に三角形の紙片をあわせて(図3参照)“この白い部分はまだぬつてないのですか”。なに色をぬつたら一番よくあるでしょう”と問う。“よくある」といふことはが理解されない場合に「一筆きれいにぬつて下さい」といふ。こへども、時間の都合で實際にぬらせてはいけないが、只8本のケレヨンを見せても取らせて、それを記録しておいた。



VI. 実験結果：

8色のケレヨンの中から、最も好きな色を選び、それを紙巻き赤系統、緑系統、青系統、黄系統に分

けで集計すると表1のようになつた。

表1

	赤系統	青系統	緑系統	黄系統
幼児	42%	25%	22%	11%
中学生	13%	53%	11%	23%
高校生	27%	34%	12%	27%

同じデータを主導色と非主導色にわけて算出し
てみると表2のようになつた。

表2

	主導色	非主導色
幼児	52%	48%
中学生	49%	51%
高校生	52%	48%

このようには8色のクレオランを値づけて調べた場合
では、第一・第二・第三番目に好まれた色彩は、
段階別には必ずしも泡の表のようになつた。

表3.

	1	2	3
幼児	赤	青	水色と緑。
中学生	青	水色	赤
高校生	水色と青	赤	水色と青

最も好きななかで色彩を階級別に挙げると泡
のようになつた。

幼児：だいだい

中学生：緑

高校生：黄緑。

男女の差を幼児の結果からみると、男児
の第一に好きな色は緑、第二は青と水色、第三は黄
緑の順になつてゐる。これに対して女児は、第一
が、ピンク、第二が、赤、第三が、だいだいとなつて
いる。そしてピンクと赤に殆んどか集まつてゐ
る。

泡は、配色についての結果をまとめると、未だ
泡のことしか見られて、最も好きな配色を各階級
について調べて見ると表4のようになつた。

表4

幼児	赤とピンク
中学生	黄と水色
高校生	青と黄

幼児の好きな配色を三位まで挙げてみると泡によ

う1=赤)た。第一・赤とピンク、第二・赤と黄、
第三・黄とピンク、黄緑と緑。11名。幼児にあ
る2第一位を示して11名赤とピンクの配色が中学生
、短大生ではどのようにならかを見ると中学生
53名中でかく1名だけにしか見られないのである。
短大生は、75名中11名だけである。幼児はか
く第二位、第三位となる11名配色も全く同様な
傾向を示している。

次に幼児の好み象に行つて三角帽子と旗をつ?

3作業の結果をまとめると表5と表6に示された

表5 旗

	赤系統	青系統	緑系統	黄系統
男	4	11	9	11
女	8	2	11	8
合計	12	13	20	19
%	19%	20%	31%	30%

表6 帽子

	男	女	合計	%
男	12	10	9	5
女	6	6	10	6
合計	18	16	19	11
%	28%	25%	30%	17%

このことは、黄色との配色は男にて、第一に好ま
れていたのは旗の場合と帽子の場合「緑系統」?
である。黄色との配色は男にて最も好まれたから
た配色は、旗では「赤系統」であり、帽子では、?
「黄系統」である。(もともと、黄色は二つ場合
同色で子のことで例がいるが)

次に、補色という概念から配色の結果を見てみ
る。青と黄、水色と黄の出現の割合を各年齢
127名で調べると表7のようになつた。

表7

青系統と黄色との配色を整理した

幼児	3% (64名中2名)	被験者1
中学生	23% (53名中12名)	割合
高校生	15% (75名中11名)	(衣服の場合)

四、結果に対する考察:

- 赤と青の順位につけては、一般的に11つめで
11つめに、などといふに前回の実験結果と一致
して結果を得た。
- 旗と帽を使つて実験の結果は、文具類と嗜好
品との関連を示してゐる。
- 幼児の結果は、現元、「男1子1色」「女
1子1色」の見方がかなり明白なところがあ
るといふと思われる。